

花隈城跡第1次発掘調査の概要

2003. 9. 20・21・23

神戸市教育委員会

はじめに

調査地周辺は、かつて花熊城^{はなくまじょう}が所在したと伝えられています。花熊城は、天正年間はじめに織田信長の命により荒木村重により築城されました。本丸・二の丸・三の丸からなり、周囲に侍町・足軽町・町屋があったとされています。その後、天正八^{てんしやう}(1580)年に、村重が信長に背いたため、池田信輝、輝政父子の軍により攻撃され、わずか数年で廃城となりました。廃城の後、兵庫城築造のため石材が抜かれたと伝えられ、現在、地表には全くその痕跡を残さず、現在では位置等も推定されるだけの幻の城となっています。現在、花隈駅前にある花隈城公園は近年つくられたモニュメントであり、実際の花熊城と直接の関係はないものです。

確認された遺構・遺物

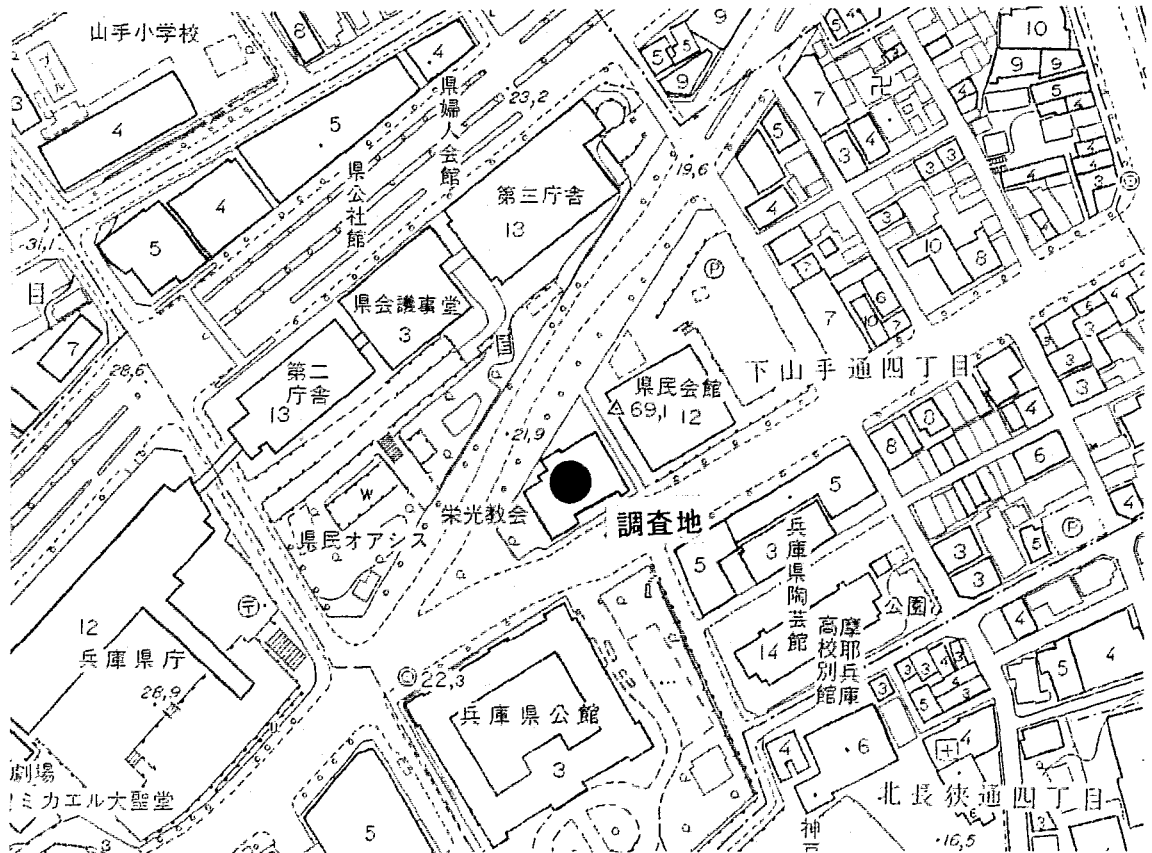
弥生時代

今回の調査では、調査地の西で弥生時代の^{たてあなじゆうきよ}竪穴住居が確認されています。

また調査地の東半では幅約15m・深さ2mほどの古い谷筋が確認され、谷底からは約2000年前の弥生時代中期末から後期にかけての土器が投棄されたような状態で出土したのをはじめ、当時の樹木が根をはったままの生えた状態で確認されました。

飛鳥～鎌倉時代

その後、谷が埋まっていく過程で、飛鳥時代から平安時代の土器が出土しています。最上層からは、鎌倉時代の土器が出土しているので、この頃に谷が完全に埋まったと推定されます。

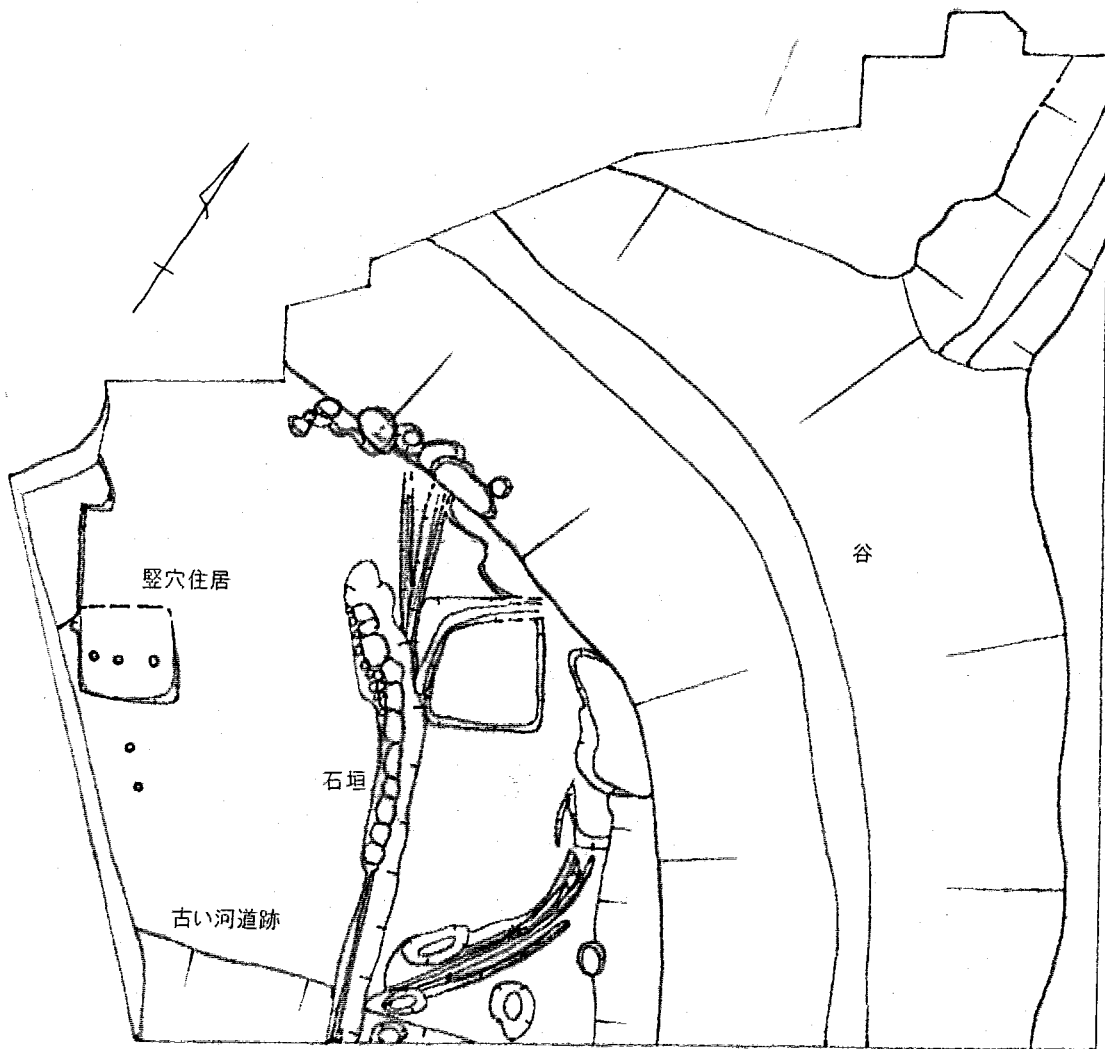


調査地位置図 (S = 1/2,500)

戦国時代

今回は、城に関連する建物等、明確に城にかかわることが判断できる遺構は残念ながら確認できませんでした。この時期の可能性のある遺構として石垣があります。後世の攪乱^{かくらん}により、最下段の一部がみつかったのですが、石材はやや大ぶりの自然石だけを用い、割ったり、磨^{みが}いたりといった加工を受けたものは認められません。この石垣の下には、沈下を防ぐための胴木^{どうぎ}と呼ばれる丸太が敷かれているのが確認されています。この自然石のみを利用する石垣は、野面積^{のづらづ}みと呼ばれ、戦国時代に特徴的な技法であり、この石垣は戦国時代のものである可能性が高いものです。

石垣周辺および前面にある側溝からは江戸時代あるいは明治時代までの陶磁器が出土しました。この石垣は土地を画するものとして栄光教会の建物が建設されるまで利用されていたようです。出土遺物のなかには戦国時代に中国から輸入された青花^{せいか}(染付)など花隈城の時代に合う陶磁器もあります。



花隈城(第1次調査)遺構平面図

0 20m

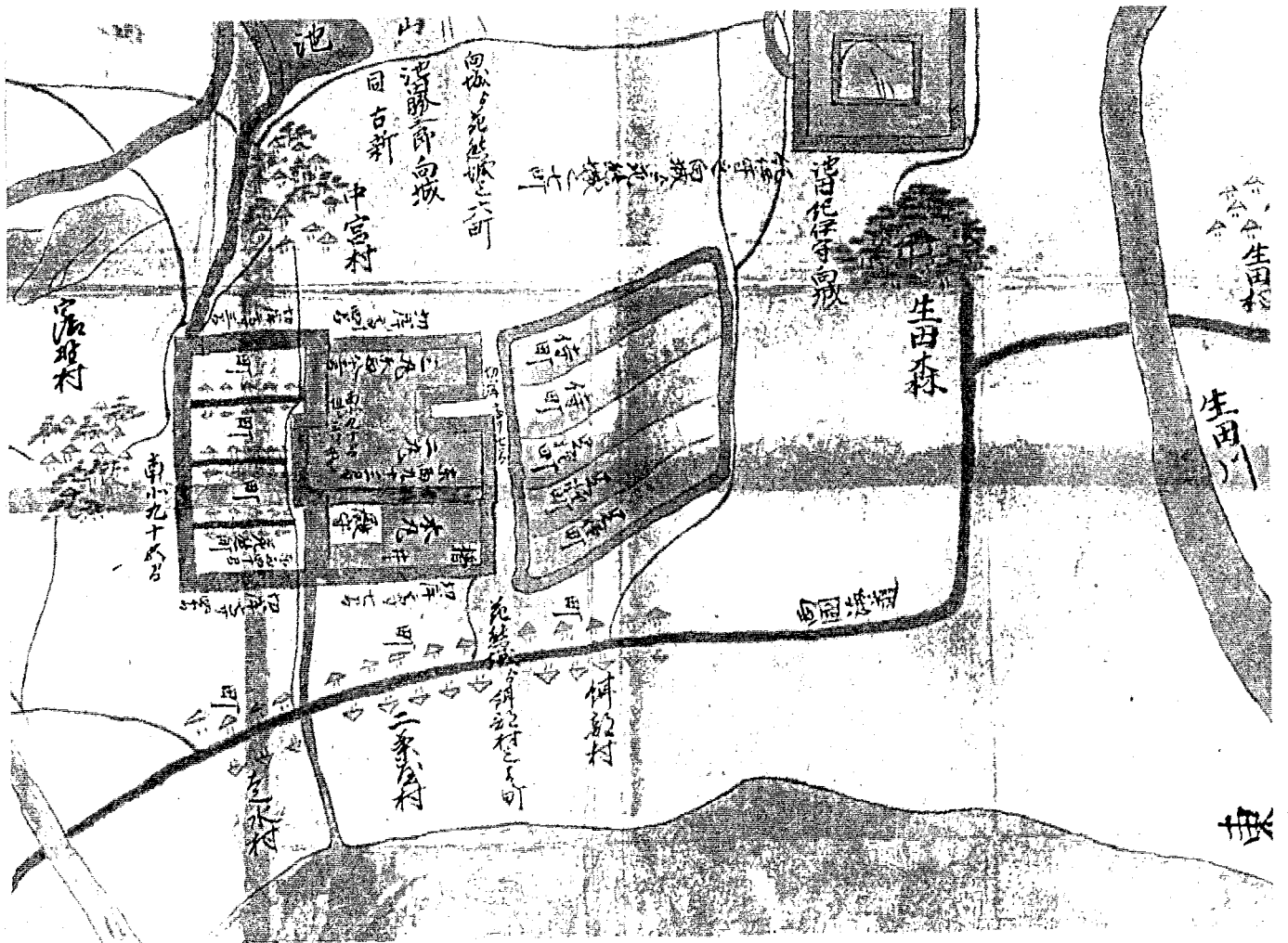
まとめ

①弥生時代の竪穴住居等が確認され、弥生時代中期末から後期にかけての集落が当地に存在することが確認されました。

②弥生時代中期末の土器に魚を描くものが確認されました。魚のモチーフは、神戸市灘区桜ヶ丘出土の国宝の4号銅鐸・5号銅鐸にみられるものが有名です。同様の絵画土器には兵庫県川西市加茂遺跡・奈良県唐古鍵遺跡・清水風遺跡などの出土例があります。これらは描法が極めて類似しており、魚に対する共通のイメージがあったと考えられます。それは単に図柄だけでなく、その背後にある物語りや神話を共有していたのかもしれない。

③弥生時代前期から戦国時代に至るまでの遺物が出土しており、当地では継続的に人々の生活が営まれていることを確認できました。また遺物の中にはヘラガキ花紋をもつ平安時代の灰釉陶器など珍しいものが認められます。

④野面積みの石垣が確認されました。これは花熊城に関係する遺構である可能性が考えられます。立地的には城の外郭部にあたるようで、岡山池田家文書『花熊城攻囲図』によれば城の東には侍町・足軽町などが描かれてあり、このあたりがちょうど今回の調査区が相当するものかと思われま。

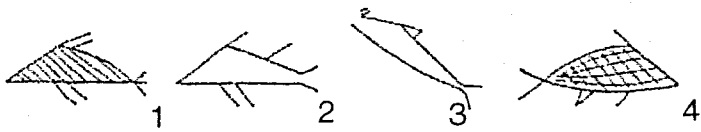


池田家文書『花熊城攻囲図』（部分）



出土した絵画土器

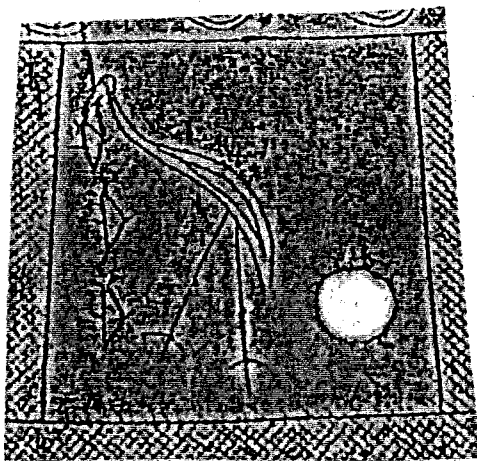
【参考例】弥生時代の魚を表す絵画



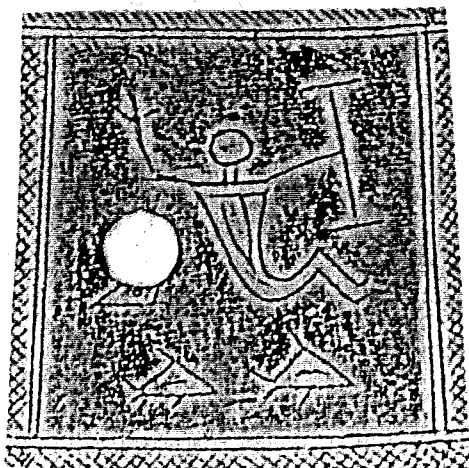
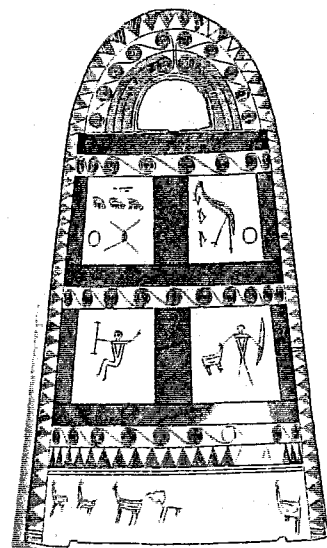
土器に描かれた魚

1・2 奈良県 唐古・鍵遺跡

3 奈良県 清水風遺跡 4 兵庫県 加茂遺跡



兵庫県 桜ヶ丘4号鐸



兵庫県 桜ヶ丘5号鐸

